

第5回「海軍の歴史勉強会」要旨

—日清・日露戦争を中心にして—

I 日清戦争

1 日清の対立

日清対立の原点は、琉球人（漁民らしい？）殺害事件にあり、日本は清国の責任追及のため、米国商船2隻に2門の大砲を積み、西郷従道が台湾遠征を行った。これにより、清国では左宗棠の対露「塞防論」を、李鴻章の「海防論」が圧倒するに至る。因みに当時、福建省海軍が最も強力で良く整備されていたのは、福建省において翻訳が進行しており最新技術を取り入れる土壌があったからであろう。

2 日清両国の情報収集

清国側の日本研究は、エリート階層による文献を基にした文化研究に偏重しており、謂わばデスクワークであったのに対し、日本側は、陸軍主導による、留学生・小売商を中心とした謂わば草の根研究により、詳細に清国情勢を把握していた。明治21年の海軍大学設立時のテーマは「対清方策」であり、清は日本まで進攻出来ず日本が進攻するという共通認識も出来上がっており、陸軍共に清国を詳細に把握出来ていたのである。

3 日清戦争（M27.8.1～28.4.17）

日清戦争は、衝角付艦艇に背中に日本刀を帯びた乗員が乗り込んで衝突後の白兵戦を前提としていたし、通信手段も有線という中世最後の時代の戦い方であったのに対し、日露海戦は無線時代の近代戦の始まりと言う両方を日本海軍は経験したのであった。

黄海海戦において、伊藤祐亨（ゆうこう）連合艦隊司令長官は度重なる北上催促にも拘わらずなかなか北上せざにいたが、北上したところに北洋艦隊と出くわし、戦闘規約（27.7.23）に基づく戦法と舷側速射砲の威力を發揮させ敗走させたのである。北洋艦隊は、一度旅順に逃げその後威海衛に逃げ込むのであった。威海衛攻撃（28.2.5）においては、日本水雷艇隊が射程300m（100m使用指導）爆薬21kgの魚雷を駆使し（当時の主砲数kg）、探照灯の盲点を突く至近距離での新月夜襲を3度仕掛け、大勝利を収めたのであった。この戦いは、水雷艇及び魚雷の有効性と威力を世界史上初めて立証したものであり、日本だけが経験した財産でもあったが、その後教訓を生かせず大艦巨砲へと進むのであった。

日露戦争後、かのロジェットウェンスキーはロシアでの尋問において、「昼、日本海を北上したのは日本の魚雷艇が怖かったから。」という記録が残る。海戦後、山縣、川上等は直隸進攻論を唱え、大本営を旅順に移動させる等作戦準備を進行させていた。並行して戦後処理の中国使節2名の派遣と活動を阻害するものの、左遷中の清国大物李鴻章の派遣までは阻止できなかったが、李鴻章が日本において暴漢に襲われ重傷を負い、世界中から野蛮国と非難される等、天皇が愈々休戦を英断され陸軍部隊の侵攻作戦を中止させるのであった。一時、日本は干渉により清から賠償金を得て軍備を縮小させたものの、

戦い毎に領土を拡大しその後軍備の増強を繰り返し、国内インフラが成長しなかったのである。

II 日露戦争

1 戦争の特徴

日露戦争の特徴に、局地戦争と海外戦争が挙げられる。局地戦争においては、日清戦争後北洋軍団崩壊による力のエアポケットが出現し関係各国での勢力争いが生じ、加えて英国の発言力も低下していた。英国はボーア戦争に45万人もの兵員を投入していたため、藁をも掴む思いで日英同盟の締結に至った。海外戦争は、日清戦争と同じであるが、陸軍の派遣・補給のため制海権は不可欠であった。

2 旅順戦

日本海軍の緒戦目標は旅順艦隊の撃破であったが、秋山参謀の閉塞作戦は成果が無く3度の作戦も失敗に終わった。因みに、米西戦争を視察した当時の秋山真之は、閉塞作戦において逃げ込んだ艦隊は必ず出てくると読んでいたらしいが、西艦隊はフィリピン派遣命令を受け、閉塞後3日目に出て来ざるを得なかったのである。旅順封鎖後、戦艦等が旅順港に貼り付けにされたため、日本周辺及び3海峡はがら空きとなり、この結果、ロシア向け密輸船が横行し、シベリア鉄道を補填しロシア側住民生活は維持されていた。ロシア側から見ると棚ぼたであったのである。

3 黄海海戦 (M37.8.10) と蔚山沖海戦 (M37.8.14)

ロシアの旅順艦隊がウラジオ艦隊と合流すべく、愈々旅順を出港するが、東郷長官が後に回想「日本海海戦で全勝を得ることができたのは黄海海戦が根本だと深く信ずる。」する如く、丁字戦法は失敗に終わり取り逃がしてしまうのである。黄海海戦の失敗後、蔚山沖海戦において上村第2艦隊が、丁字戦法を成功させてウラジオ艦隊を漸く捕捉撃滅するのであった。

4 バルチック艦隊の東航

バルチック艦隊東航の目的は、旅順艦隊と合流し日本海軍を一挙撃破することであったが、到達前に旅順艦隊は全滅 (M37.12) したため東航の前提が消滅したものの、第1革命 (M38.1.22) により帝政権威の再建が必要となったロシアは、東航命令を軍事的目的から政治目的に変更したのであった。

5 日本艦隊の対バ艦隊戦策と日本海海戦

当時の世界的趨勢は、大型艦だけから大型・小型艦併用時代に移行していた。秋山兵術は、総掛かり戦法、魚雷攻撃の活用にあり丁字戦法に乙字戦法を加えたもので謂わば、「丁字は頭、乙字は尻」であった。そして、バ艦隊行動予想である①ウラジオ直航②華北に根拠地③華南に根拠地の三つに対応させるため、朝鮮半島鎮海に全艦艇を集結させていたが、バ艦隊がカムラン湾出港後、載(給)炭船を上海に派遣した情報から②③の可能性が消え、ウラジオに行くことを暴露されていたのであった。一方バ艦隊側は、日本が3海峡に分散配備されていると見て、本格的な戦闘態勢とはいえない3列航

行をして日本海海戦に臨んだものであり、これは、2列の攻撃を不可能とされていたのであった。日本海海戦大勝後、過大なマスコミによる意味歪曲により、丁字戦法は「敵前大回頭」、艦隊決戦の意味は「大決戦」となり追撃戦は見向きもされなかった。また、戦闘記録は軍機に指定され当の海軍軍人にも教訓として生かし切れずに成ってしまう。以後、日露戦史ばかりを取り上げることとなり、太平洋戦争に至るまで、日露戦争研究・教育が主たる対象となり、「艦隊決戦論」等の横行の背景と成って行ったのである。

6 日本海海戦後の戦況

日本海軍は完全勝利により陸軍に比し、いち早く華々しく凱旋し、海上の敵がいなくなった。しかし、陸軍の勝利感は異なっており、M38.6.16「(山縣) 参謀総長は参内して別紙作戦方針北韓方面の作戦方針及独立第十三師団戦闘序列竝に同作戦計画を奏上せり」、7.14「(山縣) 総長左の御沙汰書を満州軍に奉授の爲め本日午後六時新橋発戦地に向ひ出発す 閣議伏奏の『師団増設計画書』を携行」、8.17「師団増設に関する児玉総参謀長の意見具申」、M39.2.26「日本帝国陸軍作戦計画改正に関する理由」、及び4.23「大島関東総督上奏」等、露軍の大軍団が北方に残置されたままの脅威に対し必死に対抗すべく危機感を拭い切れないうでいた。このため、陸軍が凱旋したのは、M39.4.30 で海軍に遅れること半年を経過していた。国内においても増員のための兵舎作りに見られるとおり遅々として進まず、復員の遅れ、国内インフラ整備の遅れの原因を作っていたのであった。

陸軍と海軍は異なった勝利を収めたことにより、日露戦争後、陸軍の言動は従来に増して異質のものとなり、太平洋戦争に至るまでロシアの脅威に怯えた要因になったのであろう。

(井澤研究委員記、次頁講話資料に続く)

海軍を中心とした日清・日露戦争

H.Tanaka

1. 日清対立

- ①日清対立の原点……琉球人殺害事件(M4)→清国に責任追及
「台湾生蕃ノ地ハ化外ニ置キ政教逮ハス」→清、琉球を自国領と主張せず
日本軍の台湾遠征(M7.5.22)→清国対応不可、対日硬化→対日報復論沸騰
戦闘可能艦船なし、海岸防備強化のみ→清国海軍建設の出発点
日本の琉球併合傍観(M12)→日清戦争後の台湾併合とともに決着の印象

②清国海防論の沸騰

「東海の黒子」に面子潰され李鴻章の海防論沸騰、塞防論(左宗棠)を圧倒
海軍建設案；

丁日昌案…東洋・南洋・北洋に設置、各大型艦6，小型艦10

(M6) 東洋海軍→吳淞、南洋海軍→広東、北洋海軍→天津

李鴻章案…東洋・南洋・北洋に設置、各大兵船6，小型船10

(M6) 東洋海軍→長江河口、南洋海軍→廈門、北洋海軍→旅順

江南製造総局、福州船政局、天津機器局を前提

実際の海軍…広東海軍・福建海軍・南洋海軍・北洋海軍

福建海軍が最も強力にして良く整備

※日清の対立：琉球問題から朝鮮問題にシフト

2. 日清両国の情報収集

①清国側； a. 王之春(両江総督指示の日本派遣)(M12.10～13.1)

『談瀛録』編纂、「東遊日記」「東洋瑣記」より構成、天覧意識

b. 姚文棟(第二代駐日公使黎庶昌の随員)(M15～20)

『琉球地理小志』『琉球説略』(日本地理調査、地理教科書適訳)

『日本地理兵要』10巻、北海道～九州の地理大研究、日本攻略路教示

『日本地誌』10巻、畿内八道の兵要地誌

c. 陳家鱗(在日公使館員)、『東槎聞見録』4巻

d. 傅雲龍(兵部郎中、日本旅行)、『日本遊歴図絵』30巻

e. 黄遵憲(在日公使館書記官)、『日本国志』30巻、日本陸海軍組織編成

エリート階層の日本研究(文化研究に偏重)

王之春の日本観支配的→政府・議会对立→無統制、薩長閥跋扈で不満噴出

②日本側；陸軍主導、留学生・小売商が活動の中心

a. 明治4年政府留学生……成富清風、福島九成、黒岡季備、児玉利国、 吉田清貫、田中綱常 etc

b. 明治6年陸軍語学研修生…美代清元、島弘毅、向郁、長瀬兼正 etc

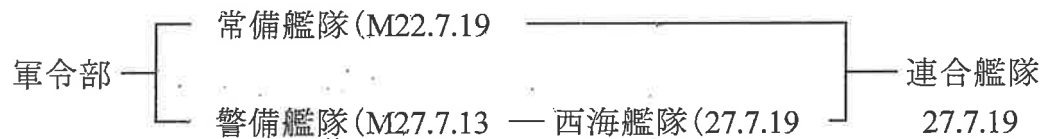
c. 明治7年陸軍語学研修生…大原里賢、東條務本、野崎弘毅 etc

- d. 明治8年以降、北京の在中公使館付武官の指揮統制
- e. 明治11年12月、参謀本部設置、管西局が朝鮮・中国調査担当
- f. 明治15年以降、中国で商業(行商)に従事する日本人組み入れ
荒尾精中尉指揮、宗方小太郎(海軍の威海衛進攻案内)、浦敬一
- g. 日本の対清方策……豊富な情報背景、現実的・合理的方策
海軍；三浦重郷大尉「対策」、島崎好忠少佐「対策」
桜井規矩之左右少佐「征清方策」
磯辺包義大佐「対策」、佐々木広勝「対策」
陸軍；桂太郎中佐「闕清策案」、小川又次中佐「清国征討策案」、
山縣有朋「軍事意見書」

3. 日清戦争 (M27.8.1 ~ 28.4.17) 有線通信のみ→大本営を広島城に

- ①艦隊の変遷；小艦隊(M3.7.25)→中艦隊(M5.5.18)→常備小艦隊(M18.12.28)→
常備艦隊(M22.7.19, 浪速・高千穂・扶桑・高雄・葛城・大和)

日清戦争直前の艦隊編成



部長：樺山資紀 司令長官；伊東祐亨、参謀長；鮫島員規→出羽重遠

②豊島沖海戦(27.7.25)；緒戦の海戦

日本海軍；第1遊撃隊(吉野・浪速・秋津洲)、速射砲有利

北洋海軍；濟遠・広乙 → 広乙大破

※高陞号事件；高陞号と護衛の操江→軍艦浪速の停止命令無視→撃沈

③黄海海戦(27.9.17)；陸兵揚陸警備中の北洋艦隊と日本艦隊との海戦

伊東祐亨連合艦隊司令長官の「戦闘規約」(27.7.23)

第一 戦闘陣形 戦闘陣形ハ単艦単位ノ単縦陣トス

第二 運動 単縦陣ノ方向転換ニハー々信号ヲ為サス、諸艦ハ宜シク
旗艦ノ通跡ヲ進ムコトニ注意スヘシ……(逐次回頭)

第三 射撃開始ノ時機 大砲ハ濫リニ慌シク打方ヲ始ムルコト無ク、
十分奏功ノ望ミアル距離ニ達スル迄成ルヘク我慢シテ差
控へ、兵氣ト砲力ノ充満スルニ至リテ一時ニ猛烈急劇ノ
射撃ヲ為スコトニ注意スル事

同 長官の「諭達」

第六項、…有益ナル戦闘距離ハ凡ソ千五百メートルノ内ナラン

二、衝突ハ最後ノ手段ニ止メ、容易ニ之ヲ行ハサルヲ良策トスヘシ

※北洋艦隊；単横陣=衝角戦法クラムに有利、熟練必要の戦法

(15 ~ 19 世紀的海戦の最後の海戦)

日本艦隊；単縦陣、快速による集中攻撃、舷側速射砲の威力(同航戦の重要性)

本隊（旗艦松島・千代田・嚴島・橋立・比叡・扶桑）

第一遊撃隊（旗艦吉野・高千穂・秋津洲・浪速）

第二遊撃隊（旗艦葛城・天龍・高雄・大和）

鈍重な北洋艦隊→日本艦隊は往復波状攻撃（三合戦）を4時間半

北洋艦隊に撃沈3隻、擱座2隻、大中破多数→敗走

※大砲による撃沈には限度、特に主砲は発展途上

④威海衛攻撃……北洋艦隊の第一根拠地

黄海海戦敗北後の北洋艦隊…旅順港→威海衛に逃避

日本艦隊…本隊・第一遊撃隊・第二遊撃隊→威海衛沖合警戒

日本水雷艇隊の夜襲

日本水雷艇隊の夜襲敢行(28.2.5)……水雷艇24隻、排水量約50屯

魚雷；射程300m→100mで使用指導、8ノット、爆薬21kg

第1次強襲；第二水雷艇隊6隻・第三水雷艇隊4隻、「定遠」擱座

第2次強襲；第一水雷艇隊4隻「来遠」転覆、「威遠」「宝筏」轟沈

第3次戦闘；水雷艇十余隻遁走→第一遊撃隊追跡し全滅

戦訓

水雷艇及び魚雷の有効性と威力を世界史上はじめて立証

魚雷発達 → 艦艇をプラットフォーム化 → 艦の大小意味喪失

歴史の流れは艦体の大型化と主砲の口径競争へ

日本の水雷艇隊強しの印象→日本海海戦に影響、その後大艦巨砲へ

日本だけの経験=財産→その後、まったく利用せず

⑤山縣・川上操六らの直隸進攻論→各国より中止勧告→三国干渉の予兆

天皇・伊藤博文・山本権兵衛慎重論

積極派(山縣・川上操六)の直隸作戦実施準備の進行

講和会議阻止→広島県庁の会議を委任状不備を理由に中止(28.2.1)

野戦第一師団・後備諸部隊の奉天派遣(3.16)

第二軍の山海関攻略作戦準備(3月上旬)

大本営を旅順半島移動→天皇嫌がり小松宮彰仁親王を征清大総督
李鴻章重傷(3.20)²⁴……世界中から野蛮国として轟々たる非難

天皇の決断；聖旨により無条件を以て3週間の休戦締約を締結

事実上の諸要求撤回、積極派の主張否定、慎重派の路線採用

※「今や直隸平野作戦の諸準備は全く整頓し其先頭に上陸すへき近衛、

第四師団の最後部隊は四月十三日を以て宇品を出発するに至りしを

以て征清大総督も亦是日威海丸に搭乘し同港を解纜し…(4.17 調印)

4. 日露戦争 無線通信の実用化、大本営は東京・艦隊は東シナ海で通信可能

① 戦争の特徴

局地戦争…日清戦争敗北による北洋軍団崩壊による力のエアポケット出現
関係各国で勢力分配招来、対立の拡大阻止、英国の発言力低下背景
海外戦争…日清戦争と同じ海外での戦争

陸軍派遣・補給のためにも制海権不可欠、陸海軍の連係必須

②旅順戦……旅順艦隊撃破→旅順要塞戦に転化

脅威はロシア太平洋艦隊（主力；旅順艦隊、支隊；ウラジオ艦隊）

海軍の緒戦目標は旅順艦隊撃破…駆逐隊攻撃失敗→旅順艦隊港内逼塞

秋山想定 of 失敗→3回にわたる閉塞作戦成果なし

機雷敷設でマカロフ提督戦死→「初瀬」・「八島」等触雷沈没

バルチック艦隊東航発表→陸軍第三軍編成、旅順背後攻略作戦

③旅順陥落までの海軍の苦戦

連合艦隊の旅順封鎖 → 日本周辺および3海峡がら空き

ロシア向け密輸船の横行、シベリア鉄道を補填し住民生活の維持

ウラジオ艦隊の跳梁 → 「佐渡丸」「常陸丸」等撃沈拿捕

制海権危機→陸軍の大陸補給計画に支障

黄海海戦(M37.8.10)；旅順艦隊の出港、ウラジオ艦隊との合流企図

東郷の丁字戦法失敗、旅順艦隊残余艦の旅順遁走

(東郷の回顧)「5月27日より8月10日こそ海軍記念日としてふさわし

い。なぜこれを偲ばないのか。わしはこれが不平でたまらな

い。……開戦以来最初の艦隊戦闘であるこの海戦で多大の経験

を得て、改良に改良を加え、方策を案じ、工夫を凝らし、訓練

に訓練を重ねたから、日本海海戦にあのような全勝を得ること

を得たので、黄海海戦が根本だと深く信ずる。」(『有終』21-7)

蔚山沖海戦(M37.8.14)；上村の第二艦隊、ウラジオ艦隊を捕捉撃滅

丁字戦法成功、制海権の安定

④バルチック艦隊の東航

旅順艦隊等を第一太平洋艦隊に

バルチック艦隊(ロジェストヴェンスキー麾下)を第二太平洋艦隊に

明治37年12月末に第一太平洋艦隊(旅順艦隊)壊滅

(老朽艦)艦隊(ネボガトフ麾下)を第三太平洋艦隊に

第二太平洋艦隊；リバウ出港(M37.10.15)、内海艦隊の外洋進出

給炭問題；仏・西等中立宣言→困難な外洋搭載

給炭業務を独ハンブルグアメリカ会社請負

→ 英カーディフ炭購入→独船・英船等雇傭し輸送

バ艦隊東航目的；旅順艦隊(第一太平洋艦隊)と合流し日本海軍を一挙撃破

旅順艦隊全滅(M37.12) → 東航の前提消滅

第1革命(血の日曜日事件、M38.1.22)→帝政權威の再建必要

東航命令 → 東航が軍事目的から政治目的に変更

ポンコツの第三艦隊追加派遣、第二艦隊の行動制約

⑤日本艦隊の対バ艦隊戦策

世界的趨勢；大砲だけから大砲・魚雷併用時代に移行

大型艦だけから大型艦・小型艦併用時代に移行

秋山兵術；総掛かり戦法、魚雷攻撃の活用

同航戦による丁字戦法に乙字戦法追加

作戦計画；a. 連係機雷による漸減戦 b. 主力艦による艦隊決戦 c. 駆

逐隊・水雷艇隊による追撃戦… a、b、cの繰り返し…

d. ウラジオ前面の機雷原に追い込み → 7段構え(後付け)

バ艦隊行動予想；e. ウラジオ直航 f. 中国華北に根拠地 g. 中国華南に

根拠地 → 三つに対応可能な朝鮮半島鎮海に全艦艇集結

※カムラン湾出港後、載(給)炭船を上海に派遣

→ 中国に根拠地をつくる意志なし、ウラジオに行くことを暴露

⑥日本海海戦

バ艦隊司令部；日本海軍は3海峡に戦力分散を予想 → ウラジオ直航可能視

日本の全艦艇との遭遇はまったくの想定外

日本海軍のバ艦隊中国根拠地設置想定に思い至らず

日本水雷艇の魚雷攻撃を恐れ、真っ昼間に海峡侵入

連艦隊司令部；バ艦隊の朝鮮海峡進入 → 小型艦艇含む全艦艇参戦可の天佑

総掛かり戦の実施可能(当日荒天のため困難 → a中止)

バ艦隊… 3列航行、戦闘陣形にあらざ

日本艦隊… 単縦列の反航 → 逐次回頭

東郷の回顧「あの8月10日の黄海海戦の戦でしくじりよ。あのとき一遍やり過ぎた。さうしたら2時間経っても4時間経っても追ひつかぬ。到頭あゝいふ具合になったよ。これで今度バルチック艦隊が来た時には、あんなことをしては済まぬから、敵が見えたらもうどんなでも構わないから突込む心算だった。それであんなにやった。」(『参戦二十提督三十年』)

→ 昭和になってからの回想、ほとんど顧みられず

戦役後の伝承；過剰な大騒ぎ、マスコミにより意味歪曲

丁字戦法… 「逐次回頭」 → 「敵前大回頭」(※「一斉回頭」)

艦隊決戦の意味 → 国家の命運を懸けた「大決戦」に変化

主力艦に対する評価急伸、日本の特技財産切り捨て

追撃戦… 小型艦艇への評価なし

※海戦の生起確実、どこに来るか、いつ起こるかがもほぼ明白

→ このような海戦は史上稀有、教訓にならず

⑦日本人はなぜ日露戦史ばかり取り上げるのか

→ 『明治二十七八年海戦史』秘密版 23巻

『征清海戦史稿本』 約 120 巻 → 『明治二十七八年海戦史』 普通版 2 巻
 刊行年 M38-39

『征露海戦史稿本』 約 250 巻 → 『明治三十七八年海戦史』 秘密版 147 巻
 刊行年 M38-39
 → 『明治三十七八年海戦史』 普通版 3(+1) 巻
 刊行年 M39-40

『明治二十七八年海戦史』は日露戦争後に刊行→日清戦争の関心薄い要因
 いずれの稿本も小笠原長生が執筆

→ 『明治二十七八年海戦史』・『明治三十七八年海戦史』編纂指導

『明治三十七八年戦役海戦誠忠録』＝軍国美談の発信源

→ 小笠原の知らずして日清・日露海戦史語ることできず

大正～昭和の海戦史編纂

大正期以降、戦史は軍機扱いとなり編纂事実も軍機、閲覧も不可能

[第一次大戦]

大正三四年海戦史	軍機	19巻
大正四年乃至九年海戦史	軍機	12巻

昭和になっても何も変わらず

[第一次上海事変]

昭和六七年海戦史	軍機	6巻
----------	----	----

[大東亜戦争]

大東亜戦争海戦史	軍機	3巻
----------	----	----

大正期より戦史編纂及び刊行戦史を軍機扱いとし全く存在知られず

→ 日露戦争(日本海海戦)しか勉強できなかった海軍軍人(日本人)

太平洋戦争に至るまで日露戦争ばかり研究・教育される原因化

太平洋戦争に至るまで「艦隊決戦論」が横行した背景

5. 日本海海戦後の戦況

(1) 38.6.8 作戦ノ必要囊ニ允裁ヲ経タル後備混成旅団編成要領ニヨリ第四十八動員ヲ
 実施シ新設部隊ハ動員完結セハ之ヲ戦地ヘ派遣セシメラレ度

(2) 38.6.16 (山縣) 参謀総長は参内して別紙作戦方針北韓方面の作戦方針及独立第十三
 師団戦闘序列竝に同作戦計画を奏上せり

一、六月初旬に於ける作戦方針

敵は奉天付近の会戦及日本海海戦に大敗を招きたる結果終に媾和の意志あることを発表するに至れりと雖も其果して誠意誠心より出づるものなるや否や未だ容易に信すべきにあらず……

一、我満洲軍は既定の作戦方針に従ひ鋭意其実行を期するのみならず成し

得れば雨期前に於て前面の敵を攻撃するを要す

二、我満洲軍の作戦と相協応し北韓方面より浦塩斯徳を脅威し又樺太占領を實行すへし

右の二個條は敵に至大の痛撃を與ふるのみならず媾和を速にし且つ有利ならしむるためにも亦有力の手段たるを疑はず……………

(3) 38.7.14 (山縣) 総長左の御沙汰書を満洲軍に奉授の爲め本日午後六時新橋發戦地向ひ出發す 閣議伏奏の「師団増設計画書」を携行

明治三十八年三月以後に於ける作戦方針を實施するに当り内国に於て設備するを要する大綱左の如し

一、新に六個師団を増設すること

二、將校の補充を豊富にすること

四、兵器弾藥馬匹竝に運輸交通機關其他軍需品補充供給を豊富にすること

理由

一、曩に陸軍兵備急設案に於て開陳したるか如く敵は将来極東に約三十六個師団を養ふことを得へし故に目下我海外に在る約二十五師団及急設案に於ける約四個師団に等しき兵力に前項の六個師団を合する時は合計約三十五師団を得へし……………

(4) 38.8.17 師団増設に関する兎玉総參謀長の意見具申

……………若し不幸にして談判不調に歸し戦争を繼續する場合に於て大本營の計算の如く敵兵三十六個師団を極東に運用するに至らば現在の我兵力(約二十九個師団)にては必勝を期し難からん又談判不調後更に戦争を繼續する時は尚長大の日月を費すに非れば其終局を結ぶ能はざるものと覺悟し且つ国力を賭して飽迄も有終の結果を収むることを期待せざるへからず之が爲めに少くも尚ほ六個師団を増設するの必要あり……………

同 陸軍兵備急設案

四、将来極東に集中し得へき露軍の兵力推定

今や露軍の第一軍団は鉄道輸送中にして九月中旬に於て全部戰場に到着すへく續て西伯利第六軍団の輸送を開始し九月下旬に来着するものゝ如し此他尚ほ「ドン」哥薩克騎兵第四師団、第八軍団、第十八軍団、西伯利第七軍団、第十三軍団、第三軍団、第四軍団、及第二十一軍団を動員若は編成し極東派遣の準備中なりと云ふ是等諸団隊到着すれば現在のものと合計し其兵力実に約我三十八師団に達すへし

五、新に増加すへき我兵力の最小極限

…而して帝国は之に対して十三個師団と後備歩兵九十四大隊即ち約七師団半を有するに過ぎず彼我兵力の優劣一目瞭然たり(參本文書、機密作戦日誌)

(5) 39.2.26 日本帝国陸軍作戦計画改正に関する理由

……………夫れ日英協約の新に成立したる今日に於て帝国の海軍を凌ぎ攻勢を取り得る国は蓋し之あらざるへし万一にも帝国に対し攻勢を取り得るの敵あらば

帝国軍は臨機容易に之に応ずるを得へし露国にして若し海軍の微弱なるに關せず単に陸上より滿韓に対し帝国の利益を侵害せんとして戦争を惹起する時は我より攻勢を取り之を打破して帝国の利権を全ふするを得へし(参本文書)

明治三十九年度日本帝国陸軍作戰計画要領

三、本計画は敵国を露西亜と想定し……………

八、我作戰方針は主作戰を滿洲に導き敵の主力を求めて之を攻撃し成るべく速に哈爾賓を奪略して烏蘇里地方と露国本土との首要交通線を遮断するに在り又要すれば浦塩要塞を攻略す

(6) 39.4.23 大島關東總督上奏

……茲ニ四閱月此間滿洲ニ於ケル凱旋軍隊ノ還送輸送ハ計画ノ如ク実施セラレ三月中旬ヲ以テ之ヲ完了シ目下管内各地ニ残存スル軍需品ノ整理竝ニ其還送実施中ニアリ而シテ滿洲ニ駐マルヘキ諸部隊ハ將ニ其整理ヲ終ラントシ銳意奮勵或ハ守備ニ或ハ經營ニ各々其任務ニ従事……………諜報ニ依レハ露軍ハ三月中旬迄ニ予後備役兵大部ノ還送ヲ終リシモノヽ如ク而シテ今尚ホ其輸送ヲ繼續セリ我軍ノ撤退シタル地方ニ於テハ馬賊出沒シ屢々良民ヲ苦メツヽリ我守備管区内ニ於テハ一ニ不逞ノ徒ナキニ非サルモ概ネ平穩ニシテ軍政及民政ノ發展ニ伴ヒ清国人民ノ信賴ヲ鞏固ニスルヲ得タルモノヽ如シ……………

(7) 42.3.13 新設兵營所在地及部隊号	第 16 師団司令部	京都	41. 8
第 3 師団	廠舎新築年月	歩兵第 38 連隊	同 42. 2
歩兵第 51 連隊	津 41. 8	騎兵第 20 連隊	同 41. 6
同 第 68 八連隊	岐阜 40.10	野砲兵第 22 連隊	同 41. 5
第 9 師団		歩兵第 53 連隊	奈良 42. 2
歩兵第 69 九連隊	富山 40.10	輜重兵第 16 大隊	同 41. 5
第 15 師団司令部	豊橋 41. 8	歩兵第 53 連隊	奈良 42. 2
歩兵第 60 連隊	同 41. 9	42.6.22 新設兵營所在地及部隊号	
騎兵第 19 連隊	同 41. 9	近衛師団交通兵旅団	廠舎新築年月
野砲兵第 21 連隊	同 41.10	鉄道第一大隊	千葉 41.11
工兵第 15 大隊	同 41. 9	同 第二大隊	同 41.11
輜重兵第 15 大隊	同 41.11	同 第三大隊	習志野 40. 8
歩兵第 67 連隊	浜松 41. 8	42.9.14 新設兵營所在地及部隊号	
42.5.31 新設兵營所在地及部隊号	第 8 師団	廠舎新築年月	
第 4 師団	廠舎新築年月	歩兵第五十二連隊	弘前 41.10
歩兵第 70 連隊	篠山 41. 2	騎兵第三旅団司令部	盛岡 42. 6
同 第 61 連隊	和歌山 42. 2	同 第二十三連隊	同 41. 8
工兵第 4 大隊	高槻 42. 2	同 第二十四連隊	同 42. 6
第 11 師団		第 14 師団	廠舎新築年月
歩兵第 62 連隊	徳島 41. 8	歩兵第五十九連隊	宇都宮 42. 4
第 16 師団	廠舎新築年月	同 第六十六連隊	同 41. 9